

# 風景

2016

## \* 京阪電鉄 出町柳駅

京阪電鉄の京都の起点・出町柳駅は、賀茂川と高野川が合流し鴨川へと名を変え、地点の脇にある。有名な下鴨神社はすぐ近くだ。大学の街らしく、学生の姿も絶えない。無機質な地下駅から上がると、堤の柳が染み入るように青い。研究室へと歩きながら、「ここはおにぎり屋。ちょっとしょっぱいけどおいしい。向こうの焼き鳥屋も良い匂いがしますよね」。定食屋や喫茶店……。生活感が色濃いた街並みを、「食」を研究テーマとする人らしく紹介していった。

下鴨神社近くの自宅から出町柳を抜けて職場まで自転車約10分。「研究室で重い気持ちになっても、帰り道に街の匂いやにざわいに触れると気分が晴れる。下町と重なる下鴨の境界の、この雑多な風景こそ、

# 「食」からナチス思想に迫る



地下にある京阪出町柳駅から地上に出たところが、自分にとって感慨深い場所だ

## 藤原 辰史 さん

### 京都大人文学研究所准教授

心安らげる場所なんです」

島根県奥出雲町の農家で育ち、1995年4月に京都大に入学。初めて都会の水道を飲んだ時、「砂の味」と感じて吐いた。翌月、テニス部の遠征の待ち合わせ場所だった京阪出町柳駅が地下駅と知らず、地上を探し回っているうちに遅刻した。「『汽車』は地上を走るものと思いきや、

ふじはら・たつし 1976年北海道生まれ、島根県育ち。京大大学院人間・環境学研究所中途退学。専門は農業技術史など。著書に『ナチス・ドイツの有機農業』（柏書房、日本ドイツ学会奨励賞受賞）、「食（ベシ）と考（ゲル）」（共和国）など。

た」。大学でも「なぜ戦争が起きるのか」との素朴な疑問から取った国際関係法のゼミで「都会育ちの学生たちのレベルの高さ」に打ちのめされた。農家育ちならではと思って「米の自由化と国際法」をテーマにしたが、「米には興味ない」と周囲から相手にされなかった。

何を学ぶべきか悩みを深めていた3年生の時、ナチス・ドイツが食の自給自足を目指し、農民を国家の中心に据えていたことを知った。世界をどん底に陥れたナチスが、自分が大切に考えていた農業を重視していたことがショックだった。

次第に、ナチスの食糧政策や農業政策が、戦争と密接につながっていたことに気づく。第1次世界大戦時に飢餓による死者が大量に出た経験から、ナチスは「子供たちを飢えさせない」として食糧の自給自足を推進した。「ナチスには有機農業を発展させ、家庭の台所に徹底した清潔さを求め、食を通じて国民の健康を管理しようとした。清潔さはユダヤ人虐殺を引き起こした民族浄化の思想的背景をなし、健康は兵隊となる男を作るために重要だった」

2002年に助手となり、12年に刊行した『ナチスのキッチン』では、ナチスがシステムキッチンを普及させ、主婦が家事をしやすいうようにし向ける一方、フランスの取れた、手の込んだ料理を奨励し、結果として国民を兵士として「育成」していった過程を論証。河合隼雄学芸賞を受賞した。

飽食と飢餓など食にまつわる現代の諸問題をどう捉えるか。解決のヒントとして提示するのが、ショッピングセンターなどにある「フードコート」だ。個食がはびこる時代に、フードコートではあらゆる人が自由に時間を過ごす。「キッチンを設けて自由に料理し、食べ、語らうのはどうか。主婦が炊事の悩みから解放され、貧しい人にも食が提供されるきっかけとなる」

12年から、ナチスのレシピで料理を作り、市民と食べる企画を行っている。「五官をフルに使った研究をしたい。最近は雑多さのないクリーンな研究が多いが、匂いのない清潔さ、雑多さを許さない思想がいかに危険か伝えていきたい」

取材の後、「一緒にお屋敷を食べましよう」と再び雑多な店が軒を連ねる街の中に繰り出した。選んだメニューは、ロールパンをカレールーに浸して食べる「カレールーパンセット」だった。（文・武田裕芸 写真・守屋由子）